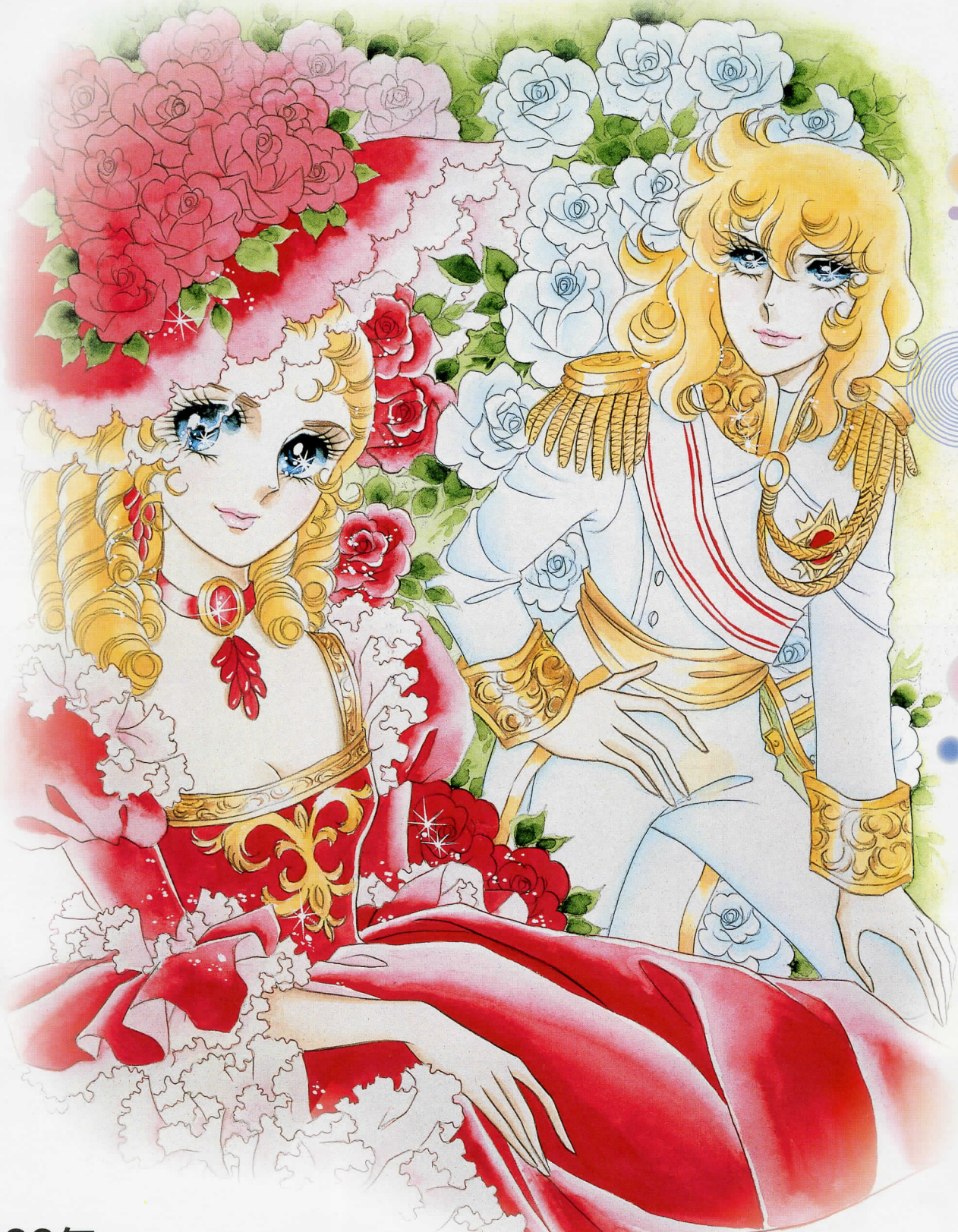


少女まんがの世界展

—8人の作家が描く少女の夢—



©ヘルサイユのぼら 池田理代子

1999年
7月30日(金)~9月5日(日)

開館時間:午前9時~午後5時(入室は4時30分まで)初日は午前10時開展式
金曜日は午後7時まで開館(入室は6時30分まで) 月曜日休館

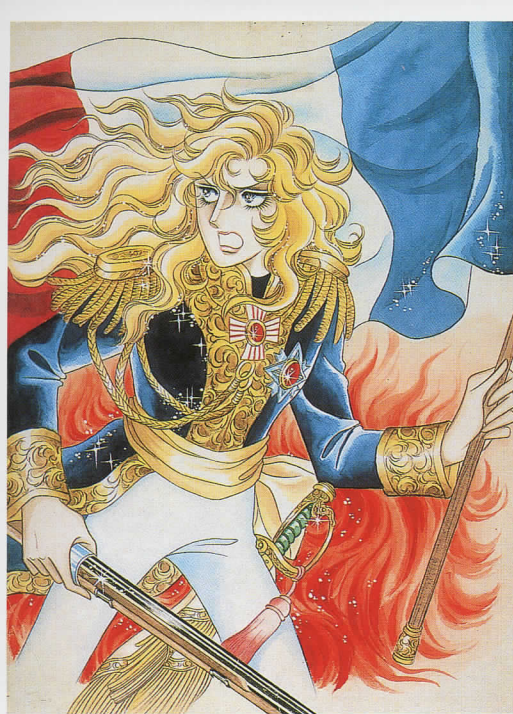
入場料:一般900円(720円)/高・大生500円(400円)/小・中生300円(240円)
()内は前売りおよび団体20名様以上の料金

65歳以上の高齢者(長寿手帳等が必要)・身体障害者手帳・療育手帳または精神障害者保健福祉手帳所持者は入場無料

高松市美術館 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 TEL 087(823)1711
Takamatsu City Museum of Art

主催:高松市美術館/読売新聞大阪本社/西日本放送/美術館連絡協議会
協賛:花王株式会社 特別協力:株式会社白泉社

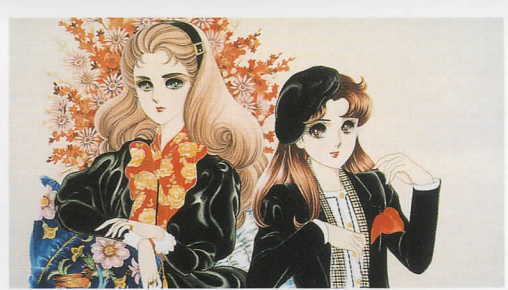
池田理代子
大島 弓子
木原 敏江
成田美名子
萩尾 望都
美内すずえ
山岸 涼子
羅川真里茂



少女まんがの世界展

1972年は、少女まんがにとってその本格的な始まりを告げる象徴的な年でした。池田理代子の『ベルサイユのぼら』と萩尾望都の『ポーの一族』の二作が相次いで発表されたのです。この年を境に少女まんがは、とりわけ「花の24年組」と呼ばれる団塊世代の描き手を中心として、女性独自の視点や美意識、世界観を強くしなやかにあらわしはじめるようになりました。1976年には美内すずえの『ガラスの仮面』の連載が開始され、翌年には、木原敏江が『摩利と新吾』を、山岸涼子が『妖精王』を発表。さらに翌1978年、大島弓子が『綿の国星』を発表しはじめ、まさに黄金時代を迎えることになります。少女まんがは女性のみならず男性の読者も獲得し、ジャンルの枠組みを大きく越えて成熟し、徐々に優れた時代の表現として認知されるようになってきたのです。

本展は、そうした少女まんがの黄金時代から現在までを、原画、イラストレーションなどの資料約270点によって回顧し、作品に盛り込まれた少女の夢やあこがれなどの内面史を検証する初の本格的展覧会です。



◎「ガラスの仮面」美内すずえ ■ Suzue Miuchi (大阪府生まれ)

高校時代に『山の月と子だめき』でデビュー。意欲作を次々と発表するが、特に1976年より開始された「ガラスの仮面」はアニメ化、舞台化されるなど圧倒的な人気を得、現在まで連載が続いている。その読者を引きつけて離さない巧みなストーリー展開には熱狂的なファンが多い。1982年、第6回講談社漫画賞受賞。



◎「日出処の天子」山岸涼子 ■ Ryoko Yamagishi (北海道生まれ)

「花の24年組」の一人。『アラベスク』で人気を確定させ、学園まんがとファンタジーを融合させた『メタモルフォシス伝』で少女まんがの新境地を開いたとして高い評価を得た。聖徳太子を描いた「日出処の天子」ではその歴史的解釈の大胆さ、新鮮さで注目を浴び、1983年、第7回講談社漫画賞を受賞した。

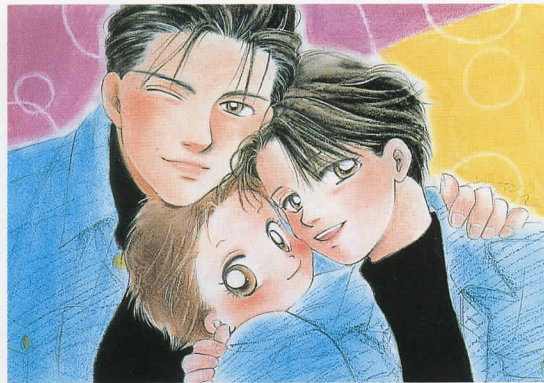
◎「ベルサイユのぼら」池田理代子 ■ Riyoko Ikeda (大阪府生まれ)

東京教育大学哲学科在学中から執筆を始め、様々な作品を発表。とりわけ、1972年より連載が開始された「ベルサイユのぼら」は大きなヒット作となり、宝塚歌劇としても上演されて一大ブームを巻き起こした。1981年「オルフェウスの窓」で第9回日本漫画家協会賞優秀賞受賞。他に『女帝エカテリーナ』などがある。



◎「CIPHER」成田美名子 ■ Minako Narita (青森県生まれ)

高校時代から投稿をはじめ、1977年『一星へどうぞ』でデビュー。年齢の若さとその達者な画力で話題となる。1978年から連載の『みき&ユーティ』で人気を得、1980年の『エイリアン通り(ストリート)』で不動のものにした。少年達の日常をファッションパブルに瑞々しく描いて、独自の世界を展開している。



◎「赤ちゃんと僕」羅川真里茂 ■ Marimo Ragawa (青森県生まれ)

幼い頃よりまんがが家になることを夢見て育つ。1990年、『タイムリミット』で念願のデビュー。翌年より連載が開始された『赤ちゃんと僕』が、主人公とその弟の愛らしいキャラクターによって人気を博した。アニメ世代を代表する新進気鋭のまんが家として注目を集めている。1995年、第40回小学館漫画賞受賞。

ギャラリートーク

当館学芸員が展示作品の解説をいたします。

8/8(日)・8/14(土)

8/22(日)・8/28(土)

午後2時より2階展示室にて

次回展覧会のお知らせ

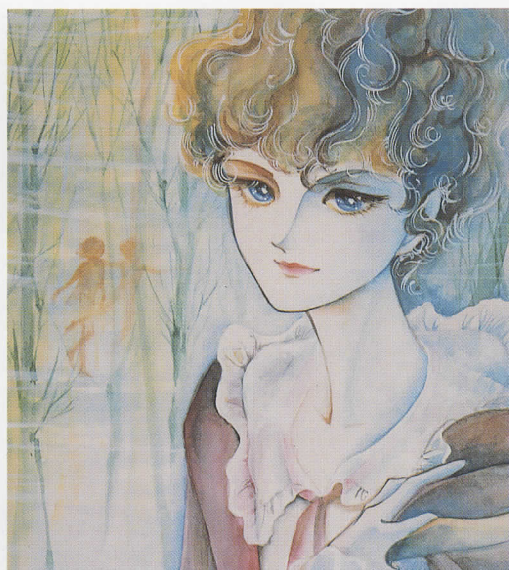
第30回 日展

9/11(土)~10/3(日)



◎「摩利と新吾」木原敏江 ■ Toshie Kihara (東京都生まれ)

「花の24年組」の一人。1970年代に少女まんがの常識を破る舞台設定で長編作品を次々と発表、一躍評価を高めた。代表作に、旧制高校に集う青年たちの恋と友情を情感豊かに描いた『摩利と新吾』、室町時代を舞台に舞の名手の愛と芸の世界を描いた『夢幻花伝』などがある。1985年に幻想roman『夢の碑』シリーズで第30回小学館漫画賞を受賞。



◎「ポーの一族」萩尾望都 ■ Moto Hagio (福岡県生まれ)

「花の24年組」の一人。少年たちの生を新たな視点でとらえた『トーマの心臓』『ポーの一族』は、その後の少女まんがに指針を与えた作品として金字塔的な位置を占めている。1976年第21回小学館漫画賞受賞。他に『11人いる!』『メッシュ』など、作品に高い文学性を漂わせた傑作が多く、幅広い読者層を獲得している。



◎「綿の国星」大島弓子 ■ Yumiko Oshima (栃木県生まれ)

「花の24年組」の一人。1968年にメロドラマ風の『ポーラの涙』でデビューしたが、その後徐々に作品の幻想的傾向を強めてゆき、『綿の国星』では擬人化された猫の目を通して見た人間社会を描いて評価を確立した。1979年、当作品で第3回講談社漫画賞受賞。1974年、『ミモザ館でつかまえて!』で第2回日本漫画家協会賞優秀賞受賞。